

モンテーニュのエッセーにおける 方法と構成について（Ⅰ）

廣 島 敏 史

目 次

序

第1章 モンテーニュ研究の歴史

- I. エッセーの版本について
- II. ヴィレールおよびボルドー市版以前
- III. ヴィレールおよびボルドー市版以後（以下次号）
- IV. モンテーニュ研究における問題と視点

第2章 モンテーニュのエッセーにおける方法と構成の問題

- I. 論証の方法
- II. エッセーの構成

結 論

序

モンテーニュのエッセーの初版が1580年刊行されて以来、今日まですでに380年余りが経過し、その間エッセーは多くの人々によって読まれてきたし、また現在でも読まれている。そして、モンテーニュの人間像について、またエッセーにもられた思想について、多くの人々が、さまざまな理解と解釈を示し続けてきた。

もともと、古典と呼ばれるほどの書物は、それが、多種多様な人々をも引きつけうるほどの **complexe** な魅力をもち、いろいろな解釈を許すほどの巾広く豊かな、奥行の深い思想をもりこんでいるからこそ、古典の名に値いするとも言えるのではないだろうか。

しかし、ここで同じように古典と呼ばれるパンセとその作者パスカルの場合

と、エッセーとその作者モンテーニュの場合を比較してみると、自ずからその事情の異なることがはっきりすると思われる。

パスカルは、天才的な数学者→当時としては最も近代的な実験物理学者→社交人つまり洞察力に富んだモラリスト→熱烈なキリスト者という経過でその短い生涯を終えた。従ってそこでは、科学と文学と宗教がパスカルという一つの人格のなかで、どのように結合され、結晶しているかという重大な問題が自ずから提起されてくる。だが、未完の断章の集積として残されたとはいえ、その遺稿である、いわゆる「パンセ」には、キリスト教護教論としての意図は明らかに示されているし、また彼の科学者としての、モラリストとしての観察と思想は、当時の自由思想家・無信仰者 *libertins* たちを攻撃する絶妙な武器として、邪道といってもよいほどの精巧な論理で、唯一の目的のために駆使されているということは、まず誰しもが認めることと思われる。すなわち、パスカルの場合には、すぐれた科学者或いはモラリストとしての彼の立場は、彼自身の意図によって、はっきり彼自身の最終の目的に結集されているということが、どんなに多くの読者或いは研究者が、彼と彼の作品を論じるにしても、明確な基本線として前提されているのである。

モンテーニュの場合には、大いに事情が異なる。少なくとも、モンテーニュの人間像の理解とそのエッセーの思想の解釈を、歴史的にたどってみるならば、たとえば彼のキリスト教信仰をめぐる、また彼の中心的な思想をどうとらえるかをめぐって、つまり人とその思想の根本的な問題点をめぐって、それが同じ一人の人間、同じ一つの作品から導きだされたとは思えないほど極端に対立する意見から、中間的な意見にいたるまで、さまざまな意見と主張がみられるのである。たとえばモンテーニュの信仰については、スクラフェール師が《この問題は、この研究の冒頭から、全く相反する二つの解決に出合うだけに、最も単純ならざる種類のものである¹⁾》と述べているように、サント・ヴューに代表される、エッセーにおける信仰告白は偽装であり、読者に対するペテンであって、彼は全くの無信仰者であったとする最左翼の説から、²⁾古くはパスカル³⁾そしてヴィレー⁴⁾など、多少の相違はあっても、善きカトリック教徒ではあったが、その *morale* はどうみても *laïque* であり、もう一歩進めていうならば

異教的であって、真のキリスト教徒とはみなしがたいとする説、ヤンセン⁵⁾や
ビュッソンのようにモンテーニュを *fidéiste* とみる説、そして彼の同時代人
をはじめとして、ストロウスキー⁷⁾や、特に前述のスクラフェールのように、ま
ことの信仰者であったとする最右翼の説にいたるまで、全部どの所説もとろ
ろえてあると言いたい位の有様である。

註

- 1) Clément Sclafert: *L'âme religieuse de Montaigne*, Nouvelles Editions Latines, 1951, p. 18.
- 2) Sainte-Beuve: *Port-Royal*, cité par Sclafert, pp. 28-30.
- 3) Pascal: *Entretien avec M. de Saci*, Œuvres complètes de Pascal, Collection de la Pléiade, Gallimard, 1954, pp. 565-574.
- 4) Villey: *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, Tome II, pp. 323-335.
- 5) Herman Janssen: *Montaigne fidéiste*, 1930.
- 6) Henri Busson: *Le Rationalisme dans la littérature française de la Renaissance (1533-1601)*, Vrin, 1957, pp. 407-478.
- 7) Strowski: *Montaigne*, Alcan, 1931, pp. 181-183, pp. 207-209, pp. 215-216

また、モンテーニュの思想の中心をどこにおくかという点でも、後述するよ
うに、彼の同時代人のごとく、実践的ストア道徳の観点からなながめる立場、
古今の多くの哲学者のように懐疑主義・ピュロン主義の立場からとらえるも
の、自然主義やエピキュリスムの立場からとらえるものなど、信仰の問題ほ
どではなくても、なおその思想の全体的な把握の困難さが思われるのである。

これらのさまざまな意見と主張を検討することは本論にゆずるとして、これ
らのモンテーニュおよびそのエッセーをめぐる諸説の対立と多様さのよって来
る所を明らかにするために、エッセーの版本刊行の経緯を考えあわせながら、
モンテーニュとそのエッセーの研究の歴史をたどってみるのが小論の目的の一
つである。そうすれば、研究成果のクロノロジーが導入されることによって、
時間を無視してみた場合には全く正と反とにわかれる、その最大限の振幅も、
やがてはその《just milieu》に向ってせばまるのがみられるのではなからう

かと思われる。つまり一言で言えばモンテーニュとエッセーの研究成果のモンタージュ写真をこしらえてみようということである。そしてモンテーニュのエッセーの研究の歴史にもなんらかの弁証法的発展がそこから望めないものだろうかと思われるのである。

しかし何れにしても、いかに対立する意見といえども、もとはただ一つ、エッセーそのものからでてきたのであるから、当然のことながら、そういう結果を生む、エッセーそのものに含まれている原因も同時に解明しなければならないであろう。そこではもちろん、モンテーニュのエッセー論述の方法、もっと限定していえば、あるテーマについての彼の論証の方法、それに、さまざまなテーマの集積であるエッセー全体の構成の問題などが解明されなければならないであろう。そして最後に、そこから、「モンテーニュの自然思想の成立と構造 *La formation et la structure de la morale naturelle chez Montaigne*」の研究へと向う、私自身の視点が確立されたらと思うのである。

第1章 モンテーニュ研究の歴史

I. エッセーの版本について

先ず、「モンテーニュ研究」といっても、ここでは、それを「モンテーニュのエッセー」を《総括的に *globalement*》研究したものに限るということ、さらにそのなかでも、きわめて特徴的なもの、そしてまた重要なものに限ることを予め断っておきたい。

さて、そこで、モンテーニュを論じ、エッセーを理解することの困難さというものが、19世紀末迄の版本を使用した場合と、20世紀になってからの版本を使用した場合とでは、はっきり違うということを、第一に再認識しておく必要があると思われる。これについては、一つの明確な証言がある。1900年エドゥム・シャンピオンはその著「モンテーニュのエッセー入門」¹⁾で、特に第16章を《モンテーニュを理解することの困難さ *Difficulté d'entendre Montaigne*》と題して、冒頭でこう述べている。《心ならずもモンテーニュを理解することの困難さについて述べなければならない。その困難さは、だが大きいし、しか

も非常に明白なのである。²⁾そしてその原因としては、何よりも先ず、《モン
 テーニュが、彼の本を構成するというよりは、むしろぞんざいにかきあつめて
 こしらえた、その並はずれたやり方 *La façon si extraordinaire dont il*
*compose, ou plutôt dont il bâcle son livre*³⁾》が問題なのであり、より具
 体的には、モンテーニュ自身が《ほんのちょっとしたおまけのつけたし
*quelque embleme suprenumere*⁴⁾》と呼んでいる、例の現在ではよく知られ
 ている版を重ねる毎の加筆が、意識しているにせよ、しないにせよ、いたると
 ころにいかにもぞんざいに挿入され、結果的には、エッセー自体を、《所によ
 っては殆んど理解不可能にすらしている *le (=son livre) rendre presque in-*
*intelligible par places*⁵⁾》ことが問題なのである。そして、さらにシャンピ
 オンは、彼によれば《気紛れ *boutade*⁶⁾》に類するこれらの加筆を、それと知
 らずに重要視しすぎてモンテーニュの全体像を見誤った例としてミシュレーを
 あげ、また先に述べたサント・ヴップについても、次のように述べている。
 《サント・ヴップはよくすべるそして魔術的な鍵を発明したのだった、そして
 その鍵が彼に、モンテーニュの一連の思考と裏に秘められた思考全体を開く確
 実性を彼に与えたのだ。この何の価値ももたない鍵こそ、エッセー全体に深く
 入りこむことがどんなに困難であるかを証明している。⁸⁾》この最後の、エッセ
 ー全体をつらぬく中心的思想の把握は、現在でも、それほど容易になったと
 は思われないが、少なくとも、シャンピオンの時代迄は、上述したテキストそ
 のものの読解の困難さが大きく前面にたちはだかっていたことは明らかなこと
 である。そしてこのきわめて具体的な不都合さから生じてきた誤ち、それも
 《正しく評価された註釈者達によって犯された誤ちのリストは、それが非常に
 不完全なものとしても、とほうもない場所を占めるだろうと思われる。⁹⁾》とシ
 ャンピオンは述べ、その一つの例として、その当時最もよく知られていたエッ
 セーの流布本の編者ルクルールが、その1844年の版本の註で、エッセー第2巻
 37章をモンテーニュのドイツ・イタリーをめぐる大旅行の後に書かれたものと
 推定している誤りをあげている。¹²⁾この誤りの原因はシャンピオンならずとも不
 可解である。すなわち、問題の章は、1580年3月1日発行の初版から存在して
 いたのだし、そしてモンテーニュの大旅行は、同年9月から1581年11月末迄に

行われたからである。なおモンテーニュの「旅日記 *Journal de Voyage en Italie*」の初版は1774年に刊行されている。そこでシャンピオンをはなれて、我々としては、強いて言うならば、二つの原因が考えられる。その第一は、校訂者ルクレール自身、2巻本の1580年版と3巻本の1588年版の関係を（これはシャンピオンも指摘していることだけれど）念頭においていなかったということである。第二は、この事を念頭においたとしても、1588年版および1595年版の数多の加筆に、それこそシャンピオンがなげいているように、まどわされたということである。なお、ルクレールはその当初の意図とは違って、ストロウスキーが¹⁴⁾《*Vulgate*》と呼んでいる、グルネーによる1635年の最後の決定版を、19世紀の数多くの校訂者と同様底本としたわけだし、またかりに「ボルドー本 *Exemnaire de Bordeaux*」¹⁵⁾にはじめてよった1802年のネージョン *Naigeon* 版を底本としたとしても、¹⁶⁾結果は同じであつたろうと思われる。またこの誤ちをさげさせ得たであろう、1580版の忠実な複製であるドゥゼームリとバルクハウゼンの版は、¹⁷⁾1870年から1873年にかけて、またついでなから、1588年版の複製はモットーとジュオーによって1873年から1875年にかけて、また¹⁸⁾《当時流布本で変質させられた1595年版の綿密な複製 *Réimpression scrupuleuse de l'édition de 1595, alors dénaturée dans les éditions courantes*》¹⁹⁾は、²⁰⁾クルベとロワイエによって1982年から1900年にかけて刊行されている。

註

- 1) Edme Champion: *Introduction aux Essais de Montaigne*, Colin, 1900.
- 2) Ibid. p. 273.
- 3) Ibid. p. 276.
- 4) *Cœuvres complètes de Michel de Montaigne*, éditées par Armaingaud, Conard, 1924-1945, Tome VI, p. 45 以下この版については全て, éd. A. と記す。
- 5) E. Champion: opus cité, pp. 276-277.
- 6) Ibid. p. 281 et note 1.
- 7) Ibid. p. 281-293.
- 8) Ibid. p. 273
- 9) Ibid. p. 279, note 1.
- 10) *Essais, avec les notes de tous les commentateurs*, publiés par J.-V. Le Clerc, Paris, 1826, 1836 et 1844, 5 vol.

- 11) 《 Les éditions vulgaires les plus connues sont celles de J. V. Leclerc et de Louandre. 》 E. Champion: opus cité, p. vii.
 《 L'édition Le Clerc, qui a été copiée par la plupart des éditions modernes... 》, éd. A., Tome I, p. 2, note.
- 12) E. Champion: opus cité, p. 279, note 1.
- 13) 《 Victor Le Clerc publia, en 1826, une édition qui, “neuf fois sur dix” (Dr Armaingaud, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres. Comptes Rendus, Paris, 1910, p. 766) reproduit le texte de 1635. 》 Marcel Françon: A propos des éditions des Essais de Montaigne, Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance, tome XXVIII-1, Droz, 1966, pp. 89-90.
 《 Est-ce à dire qu'il suffirait, pour établir une bonne édition des Essais, de réimprimer simplement le texte de 1595, c'est-à-dire de faire ce que Victor Le Clerc avait cru réaliser? 》, éd. A., Tome I, pp. IV-V.
- 14) Strowski: Montaigne, 2^e édition revue et corrigée, Alcan, 1931, p. 29, note 3. cf. 《 ce texte, auquel les érudits ont donné le noun flatteur de *Vulgate* 》, éd. A., t. I, p. IV.
- 15) Champion: opus cité, Note bibliographique, p. vii.
- 16) éd. A., t. I, pp. III-V., surtout p. V, 《 V. Le Clerc, qui n'avait pas connu lui-même l'exemplaire de Bordeaux... 》
- 17) Essais. Texte original de 1580, avec les variantes des éditions de 1582 et 1587, publié par R. Dezeimeries et H. Barckhausen. Bordeaux. 2 vol.
- 18) Les Essais de Montaigne, publiés d'après l'édition de 1588 avec les variantes de 1595 et une notice, des notes, un glossaire et un index, par H. Motheau et D. Jouaust, Paris, 1873-1875, 4 vol.
- 19) Œuvres complètes de Montaigne, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Note bibliographique par M. Rat, p. 1777.
- 20) Les Essais de Montaigne, accompagnés d'une notice sur sa vie et ses ouvrages, d'une étude bibliographique, de variantes, de notes, de tables et d'un glossaire par E. Courbet et Ch. Royer, Paris, 1872-1900, 5 vol.

そこで、シャンピオン自身はどうだったかという、彼は冒頭の書誌(前出)で以上のべた諸版についてその相違を指摘しているし、その版本の違いによる効果をその著作にともかくも持ちこんでいる。しかし、それにしても、彼の研究における不便さは、我々としては察するに余りあるし、事実彼自身、さほど

必要でもない作家の決定版が校訂されるのに、重要なエッセーの決定版が出現しないことを《遺憾なことでもあるし、不思議なことでもある Il est regrettable et étrange..., opus cité, p. viii.》としている。

しかし、よく知られている通り、以上述べた問題は、碩学ピエール・ヴィレー Pierre Villey が1908年大著「モンテーニュのエッセーの源泉と進化 Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne」を世に送り、あわせて1906年から1933年にかけて、ストロウスキ、ヴィレー、ジュブラン François Géblin によって、いわゆる「エッセーのボルドー市版 Les Essais, publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux, Edition municipale.」が刊行されるにおよんで、殆んど解決されたのである。

さて、ここで以上なぜながながとすでに解決ずみの問題をふりかえってみたかという、少くとも、モンテーニュ研究の歴史を、あらすぢにもせよたどって、そこからいわばモンテーニュのモンタージュ写真を拵えようとする場合、時代々々の読者なり、研究者が、どんな形の版本を読んだかは、第一に問題とされねばならないし、そこからはじめて、かくかくしかじかのモンテーニュ像が描かれた原因もよりよく推察されるのではないかと思われるからである。結局以上検討してきたことから言えることは、ヴィレーおよびボルドー市版以前と以後とでは、エッセーを通してモンテーニュをながめる観点が、はっきり異なるということなのである。つまり、ボルドー市版以後刊行された版本では、モーリス・ラ Maurice Rat による Classiques Garnier 中の版本¹⁾以外は、恐らく殆んどが、例の1580年版は「A」、1588版および1580年版への加筆は「B」、1588年以後1592年死にいたる迄の加筆は「C」というおなじみの記号が採用されており、我々としては、シャンプイオンのなげきをくりかえさないですむということなのである。またさらに我々はヴィレーの克明な研究によって、エッセーの各章について、その全部ではないけれど、執筆年代を知らされているわけである。

註

- 1) Essais, nouvelle édition conform au texte de l'exemplaire de Bordeaux avec les additions de l'édition posthume, les principales varian-

tes, une introduction, des notes et un index, par Maurice Rat, Classiques Garnier, 1958, 3 vol. なお、後に問題になることであるが、校訂者自身、A, B, Cの記号を附さなかった理由を次のように述べている。

《 Mais contrairement à nos prédécesseurs immédiats, nous n'avons pas cru devoir distinguer par un artifice typographique "les apports successifs des diverses éditions au texte définitif". Si l'évolution de la pensée de Montaigne se trouve par là même mieux marquée, la lecture des *Essais* en devient rébarbative et enchevêtrée, et pour une édition qui s'adresse non seulement aux étudiants et aux "montanistes", mais à tous les honnêtes gens, l'inconvénient nous semble dépasser l'avantage. 》 Ibid., t. I, introduction, p. XXXV.

これに反して、19世紀末迄の読者はもちろん、研究者ですら、エッセーを、1635年版で読んだということ、そしてそこから生じうる結果の一部はすでにみた通りであるということを、我々は我々の仕事を始めるに当って、はっきりと念頭においておかねばならない。だがまた反面、彼等は、我々と違って、版本にA, B, Cなどという、ある意味ではわずらわしい記号も持たなかったし、またモンテーニュの思想が三つの時期にわたって進化したというようなことは大して気にもとめなかったから、それこそエッセー全体を、いろいろな矛盾をみたとしても、とにかく、総括的にながめ、観察したのだということ、そうして、そうすることがかえってモンテーニュ自身の真意にそうのではないかということ、上記註1のモーリス・ラの言葉とともに、考える必要があると思われる。

従って、以下モンテーニュ研究の歴史のあらましをたどる場合、それを大きく、「ヴィレーおよびボルドー市版以前」と「それ以後」にわけることになる。

II. ヴィレーおよびボルドー市版以前

ここで検討しようとすることは二つある。先ず第一は、先程もふれたように、全く執筆年代というものを無視した版本（この場合、それは先に検討した結果から1635年のグルネー版ということになる）を用いた場合、いいかえれば、とにかくエッセー全体を総括的にながめる立場をとった場合、いかなるモ

ンターニュ像が、そこにみられるかを検討することである。第二は、執筆年代の不明というような物理的制約をこえて、モンターニュのエッセーを理解することの、根本的な困難さがあるということ、そこでそれがどんなものであるか、そしてそれが何から由来するかをみることである。

さて最初に、モンターニュの同時代人たちが、彼を、そしてそのエッセーをどう判断したかということについては、次のように要約されると思われる。つまり、モンターニュを、ゆたかな学識と経験、それにすぐれた判断力を有し、その当時理想とされた古代的な徳の体現者と見、またエッセー全体を、いたるところに洞察と英知にとんだ言葉がちりばめられている知恵の書とみる立場である。また、後に、17世紀も後半になって問題化してくる、彼の信仰と、エッセーにおける信仰告白についても、そのような異論はいささかもみられず、むしろ熱心なキリスト者、そして有能な護教論者をそこにみる立場である。¹⁾

註

- 1) 《モンターニュの同時代人々の大部分は、「エッセー」の初版を檢閲したローマの宗教裁判所の判事を始めとして、殊に彼を親しく知っていた人達は「スボンの弁護」の著者の宗教的誠実を疑わず、この長篇を伝説的宗教の正真正銘の弁護論として受取っていた様である。》前田陽一著：モンターニュとパスカルとの基督教弁証論第一章、第二節、一、モンターニュの同時代人々、P. 30、又《実際、現在迄の処では、モンターニュと同時代の者で「レーモン・スボンの弁護」を宗教の名に於いて真向から責め咎めた例は一つしか解っていないのである。》としてアントワヌ・ラヴァル **Antoine Laval** の場合が同上 pp. 33-34 にあげられている。

ただ、上記の要約の裏付けとして、いくつかの同時代人の証言のなかで、特に特徴的でもあるし、重要だと思われるのは、次の諸点である。第一は、ピエール・ドゥ・ブラックにみられる「モンターニュの平素からの、死に対処する立派な態度」の賞讃¹⁾、同じくフロリモン・ドゥ・レーモンにみられる、やはり彼の「死に臨んでの従容たる態度」の賞讃²⁾、そして次には、エッセーそのものからでてきた見方と思われる、クロード・エキスピリのモンターニュに捧げられたソネットでの「高潔なるストア流の哲人 **Magnanime Stoïque**」という呼びかけ³⁾、などからうかがわれる、モンターニュをストア的徳のすぐれた体現

者とし、そのエッセーを、特にストア主義的克己を教える書物とみる見方である。事実、1619年におそらく同時代人としては、はじめてと思われる、公式の文学的批評をエッセーに試みた、エチエンヌ・パーキエも、モンテーニュを《我が国語における今一人のセネカである C'est un autre Senèque en nostre langue. ⁴⁾》としている。

註

- 1) Pierre de Brach: *Letter à Juste Lipse*, 1593. 2) Florimond de Raemon: *Erreur populaire de la papesses Jane*, 1594, p. 159. 3) Claude Expilly: *Sonnet publié pour la première fois en tête de l'édition des Essais de Lyon*, 1595. 以上何れも *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. par P. Villey, réimpression en 1965, P. U. F., Appendice II, pp. 1201-1204 による。
- 4) Estienne Pasquier: *Choix de Lettres sur la Littérature, la Langue et la Traduction*, publiées et annotées par D. Thickett, Droz, 1956, Livre XVIII, Lettre 1, p. 46.

第二は、その同じパーキエが同じ文章のなかで、エッセーの構成というか、かきっぷりの自由奔放さにいささか辟易の体を示していることである。そしてこの書簡の宛先人であるペルジュ Pelgé氏に、各章の表題などにまどわされずひたすら内容をくむように心がけることを忠告すると共に、この奔放さの原因をモンテーニュの気質に帰している¹⁾。このことは、先に述べたシャンプイオンの苦情を思い出せば、まだしも好意的な批評ととれるのであるが、エッセーを読むはなはだしい困難さと、さらにそれとは対蹠的なエッセーを読む魅力というもの²⁾が、すでにこのパーキエの文章にはっきりと表現されていることは、特に興味深いことである。

註

- 1) 2) 何れも E. Pasquier: *opus cité*, pp. 44, et 46.

第三は、さらにパーキエが、現在我々が問題にし、重要視するモンテーニュの「自己描写 *Peinture du Moi*」の価値を、全く認めず、この部分をけずりれば、エッセーはまにちぢまるし、特に第3巻はこれがはなはだしいが、こ

れは《モンテーニュの老令の無遠慮さ la libéré de sa vieillesse》¹⁾が原因であるとしていることである。つけ加えていうならば、モンテーニュの《ガスコン方言 l'usage de Gascongne》を非難したついでに、《diversion》という語の意味と、それについての一章（第3巻第4章 De la diversion）全体の意味が、全く彼にとっては理解しがたいことを述べている。以上のことからいえることは、パーキエですら、モンテーニュの「自己描写」や特にその傾向の強い第3巻の持つ重要な意味を全く理解できなかったのだということである。

註

1) Pasquier: opus cité, p. 46.

2) Ibid., pp.43-44.

第四の点は、それでは一体パーキエは、エッセーのどこに、その魅力を見出したのかということである。これについては、パーキエは、はっきり《しかし、何よりも、彼の著書は美しく、そして貴重な名句の選集である Mais, surtout, son Livre est un vray seminaire de belles & notables sentences..., opus cité, p. 47.》と言っている。

以上4つの特徴を総合していえることは、パーキエの意見は、根本的には、彼の同時代人の、モンテーニュとエッセーについての見解を、殆んどまちがいに代表していると思われるということ、次に、従って、彼らは、エッセー全体を一つのものとしてみた上で、そこに、何よりも当時まるでベストのように流行していた、「古代的（特にストア主義）¹⁾英知に基づく実践道徳的名句集」とでもいうべきものとしての価値を認め、²⁾さらに、エッセー3巻中、その1巻を占める最長編「レーモン・スボンの弁護」（第2巻12章）には、熱烈な、伝統的宗教に対する護教論としての価値を認めていたのだということが言えると思われる。

註

1) Léontiine Zanta: La Renaissance du Stoïcisme au XVI^e siècle, Champion, 1914, Introduction-Chapitre III, pp. 21-26.; Première partie-Chap. III, pp. 75-94.

- 2) 《La philosophie morale des anciens a pénétré partout. Les contemporains de Montaigne partagent son goût pour elle et nous l'expliquent, la seule différence entre eux et lui est que souvent ils n'en comprennent pas l'esprit, et n'en tirent que peu de fruits... Pour quelques uns, il n'y a là qu'une affaire de mode, le désir d'étaler son érudition en faisant de nombreuses citations; une autorité nouvelle s'ajoute à l'ancienne, mais la méthode reste la même. L'effort rationnel est presque nul. Le rôle de ceux-là est seulement de répandre dans les masses qui ne lisent que la langue vulgaire, une quantité de maximes et de réflexions mal digérées, d'en faire comme une monnaie courante dont chacun ensuite pourra user selon sa portée.》Villey: opus cité, t. I, p. 14.

そして、20世紀現代の読者といえども、何の予備知識もなしに、エッセー全体を読めば、ストアの実践道徳とか、護教論ということは別として、「実人生に処するに際しての実践道徳的金言名句集」的な感じを持つことは容易に想像されることであって、結局エッセーを「人生をよく生きる知恵の書」とみる基本線は、16世紀から現代にまでつながっていると言えるのである。

以上の、モンテーニュの同時代人の、モンテーニュとエッセーについての見解は、ヴィレー¹⁾、ザンタ²⁾、ビュッソン³⁾らによって研究された、ルネッサンス時代の後半、1550年以後の時代思潮を、モンテーニュと関係のある方向、即ち道徳 *morale* の方向からながめた場合、その基本線が「実人生における実践道徳の探究」になるという事実と、はっきり一致している。

註

- 1) Pierre Villey: opus cité, t. I, Introduction, pp. 5-30.
- 2) Zanta: opus cité, pp. 21-26, pp. 75-94.
- 3) H. Busson: opus cité, deuxième partie-livre premier, chapitres XIII et XIV, pp. 407-478.

特にザンタが述べている、当時の哲学者、神学者、人文主義者 *humanistes* たちが、キリスト教教義との不一致をさけるため、形而上学的原理をいわば敬遠し、《実践的理性主義 *Rationalisme pratique*, opus cité, p. 76》すなわ

ち《具体的道德 *morale concrète*》もう一歩つっこんでいえば、《既成の道德 *morale toute faite*》の方向へ進み、ストア主義 *Stoïcisme* の英雄たちをその象徴として、セネカやそしてまたプルタルコスの記事のなかに求めたという事実の指摘は、アミヨのプルタルコスの翻訳がどれほど読まれたかということ、そして前述のヴィレーの述べている道德逸話・金言名句集の流行、さらにやはり上述したエッセーに対する同時代人たちの理解の仕方の理由を端的に示している。それでは彼らは、明らかに「彼らの時代のストア主義という色眼鏡」でエッセーをみたのだといいきれんだろうか？モンテーニュのストア主義については、いろいろな定義と解釈があるのであるが、諸家の意見は、それが彼によって実践された哲学ではないという点で一致している。だがしかし、ストア的態度がはっきり示されているエッセー第1巻第14章《幸不幸の味わいは大部分我々がそれについてもつ考えによること *Que le goust des bien et des maux dépend en bonne partie de l'opinion, que nous en avons*》や第1巻第20章《哲学すること、それは死を学ぶことである *Que philosopher, c'est apprendre à mourir.*》に加えられた否定的な後年の加筆も、現在の我々のようにそれと知って読む場合には非常にきわだって目をうつとしても、それを知らずに読み下した場合、読者はモンテーニュのストア的態度を強く印象づけられるのが自然だと思われる。ましてモンテーニュの思想の三期にわたる進化というようなことを考慮にいれなければ、エッセーの第2巻で人の目をうつのは何といっても第12章《レーモン・スポンの弁護 *Apologie de Raimond Sebond*》のピロニスム *Pyrrhonisme* であるし、第3巻ではそのエピキュリスム *Epicurisme* であるし、またザンタも指摘しているように、当時の人々が、実人生の必要上から、そしてもっぱら実践的道德の角度から、ストア主義をとり或いはエピキュリスムをとったとしたら、この二つの主義の間に厳密な区別、特に形而上学的原理からみた区別をたてることはあまり意味がないと思われるから、結局のところ、同時代人がエッセーについてとった態度が、つまり彼らのかけていた眼鏡が、「色眼鏡」であったと断定するわけにはいかないと思われるのである。これは後に問題になることであるが、ストア主義と言い、或いはエピキュリスムと言い、究極の所、「心の平静平安を得るための情

念の統御」という根本的な観点からながめれば、その基本的態度はエッセー全体を通じて変えることはなかったと言えるのではないだろうか。

註

- 1) Zanta: opus cité, pp. 91-93.

(この項未完)